

# 八王子市いのちの大切さを共に考える日



## ○ 校長講話（令和5年6月8日）

今日は、こころの日「いのちの日」です。これから「いのち」について大切なお話をします。1年生や2年生にも伝わるように分かりやすくお話しますので、逆に高学年の人には説明が多くなって理解しづらいかもかもしれませんが、しっかり聞いてくれると嬉しいです。

私たち人間は、生まれてくるときに「幸せに生きるための切符」を手に握って生まれてきます。みなさん、今自分の手のひらを見てみてください。何も持っていませんよね。でも、目には見えないけれども、みなさん一人一人の手には「幸せに生きるための切符」が握られています。

となりに座っている友達も、みなさんのおうちの人も、先生たちも、もちろん校長先生も、同じようにみんな「幸せに生きるための切符」を持っています。私たち人間は、この切符を持って、人生という長い旅に出かけます。

この切符は一人にひとつしかもえられないので、大切に握って無くさないように生きていってくださいね。

ところが、時々、友達が持っている「幸せに生きるための切符」を、平気で折ったり、くしゃくしゃにしたり、破ったりする人がいます。

あれ、さっき校長先生は「幸せに生きるための切符」は目には見えない…って言いましたよね。目に見えないものを、どうやって折ったり、くしゃくしゃにしたり、破ったりできるのでしょうか？

友達に対して悪口を言ったり、いじわるや仲間外れをしたり、SNSなどで相手が傷つくようなメールを送ったり、ぶったり蹴ったりして暴力をふるったり… そういうことをすると、友達の「幸せに生きるための切符」は折れ曲がったり、くしゃくしゃになったり、破れたりします。そうすると、心や体がとても傷ついてしまうのです。

大切にしている「幸せに生きるための切符」が傷ついてしまったら、どうなるでしょう？ きっと悲しい気持ちになるでしょうね。悲しくなるどころか、幸せに生きることができなくなってしまいます。そして、幸せになれないなら、生きることがつらいな… 生きていてもつまらないな… と思ってしまうかもしれません。それが理由で命を失くす人がいたとしたら、それはとても辛く悲しいことです。

ですから皆さん、どんなことがあっても、お友達の「幸せに生きるための切符」を折ったり、くしゃくしゃにしたり、破ったりしてはいけません。もちろん自分の切符も大切にしてください。

命はなくしたら代わりはありません。いくらお金を出しても買えないし、どこに行っても命は売っていません。どうか、自分の命も友達の命も大事にしてください。みんなでお互いに「幸せに生きるための切符」を大切に守りながら、助け合って生きていってほしいと思います。

## 1年生「ハムスターのあかちゃん」

ハムスターの赤ちゃんが生まれたよ。毛が生えていないし、目もあいていない。お母さんが赤ちゃんを口にくわえているよ。お母さんのまえばは、かたいひまわりをかめるほど強いけど、赤ちゃんをそっとかんでいる。だからものをまもっているみたい。生まれて十日たった。毛が生えて背中のもようがよくわかる。ハムスターの赤ちゃん。早く大きくなあれ。小さい体にどんな力がつまっているのかな。



始めに、動物と触れ合った時のことを話しました。犬や猫、イルカまで出てきて、ハムスターも出てきたので、そこで、資料に入っていました。読み終わって、ハムスターの赤ちゃんが大きくなっていく様子を、挿絵を使いながら確かめると、子供たちは、自分が育てているかのように可愛くてしょうがないといった反応でした。場面ごとのハムスターの赤ちゃんへの語り掛ける言葉は、無事に大きくなってきたことの喜びや、これからの励ましなど、小さな命への優しさがこもったものばかりでした。

## 2年生「たんじょう日」

今日は誕生日。なつこは生まれたときのお話をお母さんから聞きました。未熟児で生まれ、40日間も保育器に入っていたこと、その間お母さんが毎日母乳を届けていたこと、心配で心配で仕方がなかったこと…。そのお母さんの話は自分に向けられた愛情にあふれており、なつこにとって何よりもすばらしいプレゼントとなりました。



子供たちは「誕生日」という言葉から、自分が生まれた時のエピソードを思い出しながら、学習に入り込むことができました。お話の内容から、我が子を心配する母親の気持ちをしっかりと感じ取っていました。「みんなが生まれた後、お母さんから離れたけど、みんなとお母さんは今もつながっているんだよ。」という話に、子供たちは聞き入っていました。最後には「自分の命を大切にしたい。」という感想をもつなど、「一人一人の命」を尊重する気持ちが高まりました。

### 3年生「又チ又グスージ」（いのちのまつり）

「ぼうやにいのちをくれた人は誰ね?」「それは……お父さんとお母さん?」「そうだねえ。いのちをくれた人をご先祖さまと言うんだよ」「ねえ、おばあさん、ぼくのご先祖さまって何人いるの?」コウちゃんは、指をおって数えてみることにしました。すると……。



「又チ又グスージ」とは、沖縄で行われている命の祭りのことで、家族や親戚が集まり、ご先祖様のお墓の前で歌ったり踊ったりするなどして、感謝の気持ちを伝えます。主人公のコウちゃんの姿を通して、自分たちに命をくれた人について考えました。子供たちは、自分たちがたくさんの人から命のバトンを受け取っていることに気付き、「ご先祖様に感謝を伝えたい。」「自分もいつかご先祖様になるのかな。」と、命のつながりについて考えるきっかけにすることができました。

### 4年生「わたしの見つけた小さな幸せ」

突然病気になり、当たり前だったことができなくなった私は、元気になり久しぶりに行った学校で、たくさんの小さな幸せを見付けることができます。



日常生活の中でも、生きている喜びを感じ取っている自分に気付くことが、この授業のねらいです。子供たちは、教材の主人公の心情を考えた後、「どんなときに、命の大切さを感じるか」自分自身の生活を振り返りました。子供たちからは、「友達と会えたり、学校に行けたりすることだけでも幸せなこと。」「病気やケガが治ると、いつも通りに生きることが幸せだし、大切だと思った。」など様々な考えが出ました。生きている喜びと尊さについての感じ方を深めることができました。

## 5年生「クマのあたりまえ」

子グマが森を歩いていると、見かけたことのあるおすグマが死んでいるのを見ました。死んだおすグマのことが忘れられない子グマは死なないものになりたいと森を探し、石になりたいと石に教をを請います。石になってみた子グマは石（死なないもの）の寂しさや当たり前のことのよさに気づき、死の恐怖を携えつつも、クマのほうがいいとわかり、森の中へ戻っていきました。



死の恐怖を感じることができるのも生命があってこそのこと。そこで今回は、「生命があるからこそ、あるものとは何だろう?」と考えてみました。「嬉しい悲しいの感情がある。」「考えて、自分らしさを出することができる。」「家族や友達と話すことができる。」「達成感を感じることができる。」「限りある人生だからこそ、楽しめる。」などたくさんの考えを交流する中で、「みんなの話を聞いて、生きていることが一番幸せなんだなと思った。」「死んでしまうのは怖いけど、「今」をこうして生きているというのを感じた。」「友達の意見から限りある人生を楽しみたい!」と思った。」と、生命のあることの有難さについて立ち止まって考える時間となりました。

## 6年生「命の重さはみな同じ」

大阪府能勢町にある認定NPO法人のハッピーハウスは、捨て犬や捨て猫を保護する施設。人間の勝手な都合で捨てられた犬やねこたちは、絶えません。この施設に収容された動物たちそれぞれのドラマを追いながら、命の重さを伝える感動ノンフィクションです。



施設に届けられた捨て犬。みんなだったら、どうするかを中心に話合いました。手術をしても、片足を切断しなければならなく、飼い主も現れるかわからない状況。助けることが正しいのか、安楽死の処置をすることも正しさなのでは? 対立した異なる考えの中で答えを導くことは難しいです。安楽死を勧める獣医と助けようとする施設の人との間にある共通点について考えました。その中で見えてきたことは、その生き物の立場になって真剣に考えることの大切さでした。命の重みについて真剣に議論し合うことができました。